

シェイクスピアの『十二夜』を現代風に読む  
—読みやすい入門編？ ラノベ型『十二夜』—

松山 響子\*

Reading Shakespeare's *Twelfth Night* in Modern Form  
—Easy Introduction to Classics? Light Novel Style *Twelfth Night*—

Kyoko MATSUYAMA\*

Abstract

In 2016, the 400 year anniversary of Shakespeare, there were many publications related to the famous English Byrd. One such publication was Ririka Yoshimura's *Jyuniya — Migawari Koshou to Fukigenna Koushaku* (*Twelfth Night, the Interchanged Page and the Sullen Duke*) from Kadokawa Publication's B's-LOG Bunko a novelization, in the form of Japanese light novel, of Shakespeare's *Twelfth Night*. This paper discusses the style of the novelization and what this format has brought to the *Twelfth Night* written by Yoshimura. Yoshimura's *Twelfth Night* mainly deals with the love-story of Orsino and Viola, dressed as the page Cesario, as did the play. In the light novel version Yoshimura has added a lot of details that could be only possible in the form of a novel. But somehow the author has omitted one famous scene: It is considered as one of the highlights of Shakespeare's *Twelfth Night*, the tormenting of Malvolio. What purpose did it serve by omitting such an important and famous scene within the play: is it because of the style of the light novel, light novels is a genre of novel that often targets young adults as their reader and did such back ground affected the contents of the novelization, or was it simply the author's idea to maintain the focus of the novel to love-story.

2016年にビーズログ文庫より出版された吉村りりかの「恋するシェイクスピア」シリーズはライトノベル（以後ラノベ）の体裁を取り、シェイクスピアの読者や観客のすそ野を広げる可能性のある画期的な翻案である。シリーズは現在2作出版されており、1作目は『ロミオとジュリエット』その後には『十二夜（以後ビーズログ版『十二夜』とする）』が出版をされている。

それぞれの作品には、未読の読者にわかりやすい副題が付与されている。そしてビーズログ版『十二夜』の副題は「身代わり小姓と不機嫌な公爵」である。本論では、ビーズログ版『十二夜』の翻案において、変更あるいは強調されている部分と省略を余儀なくされている部分を原典と比較し、21世紀の日本人読者に『十二夜』を説明する際に、どのような部分が必要と思わ

\*人文学部 国際文化学科

れ情報が付与され、そしてどのような部分が受け入れやすいと思われシェイクスピア版に忠実に小説家されているのかを考察していきたい。なお本稿においてラノベ（ライトノベル）とは新城カズマの新書『ライトノベル「超」入門』にある「マンガ/アニメっぽいイラストが挿絵として使われている若い人向けの小説」を定義とする。<sup>i</sup>

ラノベ形式の『十二夜』を出版した、ビーズログ文庫は出版レーベルのホームページで「はっとしてキュンとする恋を呼ぶときめきレーベル」とし、出版する作品のジャンルを明確に定めている。端的に言ってしまえば、このレーベルで出版をされている作品は全てロマンス小説あるいは恋愛小説である。必然的にビーズログ版『十二夜』も恋愛小説としての体裁をとることを要求される。そのため、「恋するシェイクスピア」シリーズのホームページには以下のようなキャッチフレーズが、トップに踊っている。

<sup>ガチ</sup>  
本気で読みたい名作シリーズ

シェイクスピアはラノベだ。

—「シェイクスピア」をライトノベルで読もう。

シェイクスピアという名前や、演目のタイトルは広く知られているにもかかわらず、きちんとシェイクスピアのお話を読んだこと、または劇を見たことのある人は、どれだけのいるのでしょうか？

そこでビーズログ文庫のテーマである「恋愛」を主軸にラノベ化！

—シェイクスピア没後400周年×ビーズログ文庫10周年の大型企画です!!<sup>ii</sup>

書籍タイトルも恋愛要素を要求されるため、原典そのままの『十二夜』では内容を推測することが困難である。そのため「身代わり小姓と不機嫌な公爵」と副題を付与し、西欧風宮廷が舞台の恋愛小説であることを示している。これはビーズログ文庫読者の興味を引く設定であることが、同じレーベルから出版をされている他の小説のタイトルからも推測できる。

しかし副題は問題を含んでいなくはない。それは「小姓」が少年で「公爵」も男性を示していることである。「小姓」と「公爵」を文字通り受け取ってしまうと、ボーイズラブ小説であると受け取られかねない。しかし、ビーズログ版『十二夜』の場合、「身代わり」という言葉を使用することによって「小姓＝少年」という可能性を否定し、表紙のイラストからオーシーノー公爵らしき人物の右隣の可愛らしい小姓が後ろ手に抱えているのはたっぷりとした水色のドレスらしき布である。この2点を使うことによって故障の姿かたちをしているが女性であることを示唆している。表紙の絵柄も少女マンガ的であるため、上演の舞台においてよりは容易に小姓の性別を男性とも女性ともとることが可能である。



そしてこれらの、副題や表紙の絵柄を仕掛けとしてビーズログ文庫の読者の興味あるいは共感を誘うことは可能である。また「恋するシェイクスピア」とタイトルよりも大きくシリーズ名が強調されているため、通常のシェイクスピア劇の翻案小説ではなく、恋愛要素を強く含んでいることを強調しているため、「シェイクスピア」という古典作品に対する心理的なハードルを下げ、そして古典を新たな読み方で解釈しているという可能性も示唆していると言えよう。

古典作品の再解釈は、どの時代でも行われているが、「古典作品」というラベル付が持つ心理的なハードルは一定のものとして存在をする。そのため、少年少女向けに翻案として出版されたり、あるいは朝霧カフカ原作、春河35作画の『文豪ストレイドッグス』のように作者と作品を融合して、まったく新しい作品を作り出したたりし、読者の「古典作品」に対する心理的ハードルを下げたり、あるいは心理的ハードルを回避したりしている。

### シェイクスピア版「十二夜」に対する情報付加と削除

ビーズログ版「十二夜」は主にシェイクスピア版に対して情報を付加していく形で十二夜の物語を再構築している。ほとんどの情報付加はシェイクスピア版の第1幕と第2幕にあたる部分で行われており、第3幕以降は4幕2場の「マルヴォーリオいじめ」の場面と登場人物フェビアン省略を除き、多少の順序の入れ替えはあるがほぼ忠実にシェイクスピア版を小説化している。

最初の情報付加はシェイクスピア版「十二夜」1幕2場の後に挿入されている、ヴァイオラがオーシーノーの館に面接に向かい働き始める場面である（ビーズログ版では1幕1場が省略されており、この場面挿入で初めてオーシーノー

が登場し、その人となりで紹介される形になっている。）以下にビーズログ版よりのオーシーノーの描写を引用する。

夜の帳を思わせる美しい黒の髪に、黄昏時の空を思わせる物憂げな金の瞳。その鼻筋はすらりと通っており、薄い唇と併せてみると、まるで作り物めいて美しい。

年は、二十を超えた頃だろうか。公爵という名から壮年の男性を想像していたヴァイオラは、思いがけず若々しく美しい青年の姿に呆然と立ち尽くした。

（こんな綺麗な男の人、初めて見た……）

自分の兄も十分に美しかったが、彼が持っているのは中性的な優雅さだ。オーシーノーのような雄々しさを感じさせる端正さではない。

しかし、その秀麗な面差しはどこか素っ気なく、瞳には夜に降る雪を思わせる冷たさが宿っていた。けして溶けない氷のように怜悯で、安らぐことなど知らないように見える。

その目が、射るようにヴァイオラのことを見た。まるで、鷹に睨まれたように、ぞくりと寒気に似た何かが背筋を這い上がる。<sup>iii</sup>



通常シェイクスピア版の十二夜において、こ

のように登場人物の容姿を詳細に明記する描写は存在しない。この違いは当然ながら戯曲と小説の持つ性質の違いからきている。戯曲の場合は上演が主たる目的であるため、登場人物の容姿の説明は役者が舞台上に登場するため不要であるが、小説の場合は読者の想像力に任せるだけでは難しいので、登場人物描写にある程度の字数を費やす必要がある。この場面における情報付加の目的はヴァイオラがオーシーノーの容姿に見られるとともに「ぞくりと寒気に似た何か背筋を這い上がる」と書くことにより、オーシーノーに対して何らかの感情が彼女の中に生まれていることを示唆するためである。特にビーズログ版の中で丁寧に書かれている部分はヴァイオラやオーシーノーの性格形成やヴァイオラがオーシーノーに惹かれていく部分である。特に戯曲の中ではシザリーオがオーシーノー公爵に気に入られていく過程は存在しないが第1幕第4場で仕事を初めて三日ほどで気に入られたことが言及される (Liv, 1-4)。ビーズログ版ではシザリーオが小姓ではなく秘書官の仕事させられても文句も言わず働く姿を見て、オーシーノーが次第に信頼を寄せていく様子が50ページほど描かれていく。そして一緒に働くことでオーシーノーがオリヴィアに求婚をした理由が説明され、オーシーノーが不機嫌であることの原因が人嫌いであり、父公爵が妻に逃げられ人嫌いを息子に教え込んだという生い立ちがその理由として説明されたりしている。その後、決定的にヴァイオラがオーシーノーへの恋を自覚するのは、嵐を怖がるヴァイオラをオーシーノーが地下のワイン蔵に連れていきなだめていた時である。この時に互いの生い立ちを知り、距離が近づいていく。そしてオーシーノーからは「どうしてお前は、男なんだろうな……」という言葉でヴァイオラは自分の恋心を自覚する<sup>iv</sup>。この丁寧な描写により、時間は戯曲の三日より

長くなっているが、読者にとって説得力のある設定作りが行われている。実際に吉村があとがきで「原作だと三日で公爵様の寵愛を得るシザリーオ君ですが、今回はじっくりと時間を書けて距離を詰めてみました。」<sup>v</sup>と言及し小説ならではの説得力を持たせたものと思われる。

この後に付加部分はすべて各登場人物が「なぜそのような行動をしたのか」ということへの補足説明となっている。例えばオリヴィアが突然シザリーオと会う理由を次のように述べている。

若い青年が来ていると知った途端、硬い意志をもって断っていたオリヴィアの心も揺らいだ。その青年はきっと、オリヴィアに会うまで帰ってくるなどオーシーノーに言われているに違いない。

特にオーシーノーは、召使に厳しい人だと聞いている。オーシーノーの求婚に応えるつもりはなくとも、この使いのせいで若い青年が叱られるのは出来れば避けたい事態だ。<sup>vi</sup>

また、オリヴィアの居室に通されたシザリーオが困惑する1幕5場163行からの場面において、どのようにして事態を切り抜けたのかを下記のように述べている。

(こんな時、お兄様だったらどうするかしら……)

兄の女性の扱いはというと、それはもう鮮やかなものだった。兄の言葉を聞かない女性は一人もおらず、だれもが兄に声をかけられると頬を買絡め、瞳を潤ませ、一言も聞き漏らすまいと兄の顔をじっと見つめていたものだ。

(中略)

ヴァイオラは記憶の中の兄と同じように

背筋を伸ばし、少女たちに控えめに微笑みかけた。

(中略)

伏し目がちに、吐息と共に甘く囁く。それからきげんを伺うように少女に目配せすると、小麦色の髪の少女は、はっと目を見張った。その瞳が僅かに熱を帯びる。<sup>vii</sup>

このようにして、登場人物たちの台詞がどのような感情に基づいて発されているのかということが詳細にわかるようになっていく。そのため、シェイクスピア版では唐突ともいえるような、登場人物の決断や、求婚が説得力をもつものとなっていく。そして恋心を自覚していくプロセスを丁寧に描写することで、シェイクスピア版の4幕以降と同様の小説中盤以降の目まぐるしい恋愛模様に対して説得力を与え、またスピード感にも応えられるようになっていく。同時に恋愛とは関係のない要素は切り捨てられている。

ビーズログ版で大きく省略されているのは4幕2場のマルヴォーリオいじめの場面である。それ以前のマルヴォーリオをからかい、黄色い靴下をはかせるための手紙を仕込む部分は詳細に書かれている。吉村はあとがきでマルヴォーリオいじめの場面は恋愛には不要なものとして語っており、実際に4幕2場は痛快な場面こそあるが、恋愛要素という点から見ると物語にあまり関係のない場面であると言えるのは確かである。しかしシェイクスピア版においては「マルヴォーリオいじめ」が上演において白眉ともいえる場面になってはいる。そして恋愛要素の不足という理由だけでは「マルヴォーリオいじめ」の削除の理由説明としては難しい。しかし、飯田一史の『ベストセラー・ライトノベルのしくみ』のなかでラノベの主要なジャンルが「バトル」と「ラブコメ」であると言及をしている<sup>viii</sup>。「ラブコメ」そして「バトル」という観点でビーズ

ログ版『十二夜』を見ていくと、「マルヴォーリオいじめ」は「バトル」をした結果、負けたマルヴォーリオがとどめを刺されていると取ることができる。そしてビーズログ文庫が「恋愛」を主眼に置いた小説であるということならば、「バトル」の要素を排除して小説を書いているかということ、マルヴォーリオを一切排除して書いてはならず、困った「恋敵」と「笑い」の要素を与えて「いじめ」の場面以外は登場している。「ラブコメ」の「コメディ」要因としての役割を果たしているのである。ではなぜ「いじめ」の場面が「恋愛には不要とされたのか。これは飯田の示すライトノベルに求められる要素を見ていくことで明確になる。飯田はライトノベルに求められる要素として以下の4点を挙げている。

オタクたちはライトノベル「楽しい」「ネタになる」「刺さる」「差別化要因」の4つを求めている。

楽しくポジティブな感情になるもので、友達との会話のネタになって（コミュニケーションを誘発するもので）、胸に刺さる（感動する）、そしてその作品でしか読めない何か固有のものがある——という作品を求めている。

「ネタになる」ものを消費することも「楽しい」のではないか？そのとおりである。ここでいう「楽しい」は個人で完結する（個人で感じられる）楽しさのこと、「ネタになる」は他者と分かち合う、交流する楽しさのことと考えてもらってかまわない。<sup>ix</sup>

この点からビーズログ版を読んでいくと、そもそも『十二夜』という作品が喜劇であるということから「楽しい」という要素はすでに持っているものである。では「ネタになる」という



要素はどうであろうか。こちらは古典をライトノベルとして再構築しているという点がまず「ネタ」になるであろう。しかし、古典の書き換えは伝統的に様々な形式で行われており、書き換えを古典のパロディとすることもできれば、古典の言葉を時代に合致する形に書き換えることで言語的な難解さゆえに読まれなくなった作品あるいは一時期敬遠されるようになってしまった作品を再紹介するという観点から行くと珍しいことではない。では「ライトノベル」という形式をとることはどのようにして「ネタ」になるのであろうか。それは「古典」と「ライトノベル」という一見すると共通項がない、あるいは対立項にあるような文字媒体のジャンルが合体して使われていることによって生じる面白さであろう。特にビーズログ版の副題「身代わり小姓と不機嫌な公爵」は女性向けのライトノベルやそれに類する小説ジャンルに見られる題であったとしても、古典と関連付けられることはあまりない。この古典に関連付けられることが考えられないものが、関連付けられているというおかしみが「ネタになる」という要素である。「刺さる」という要素に関しては、そもそも『十二夜』は生き別れになった兄弟が再開し、それぞれが幸せな結婚をするという「感動できる」要素が含まれており、そしてライトノベルに不可欠な「ラブコメ」の要素も当然ながら内包している。「差別化要因」は古典のライトノベル化、そして戯曲『十二夜』の中では示されていない様々な場面を付け加えることで、二次創作的な楽しみと共に、古典作品のもつ自在な要素あるいは時代に合わせて手を入れても、それらを受け入れてしまう要素を「ネタになる」とともに「差別化要因」とみなすことはできないだろうか。実際、これは古典作品のパロディという要素で考えていくと、様々な作品が日本あるいは海外を問わずある。記憶に新しいのが

『十二夜』と同じ英語圏の文学作品のパロディとしてヒットしたセス・グレアム＝スミスの『高慢と偏見とゾンビ』がある。これは19世紀の女流作家ジェーン・オースティンの『高慢と偏見 (*Pride and Prejudice*)』をゾンビ小説として書き換え、小説全体の7割程度がオースティンの文体という立派なパロディ小説である。ビーズログ版はシェイクスピアの戯曲をそのまま使っていないということからパロディではないとされるかもしれないが、小説のプロット、登場人物、設定などあらゆる面でシェイクスピアの『十二夜』であるということに疑いの余地はない。パロディという点で判断が難しいとすれば、それはシェイクスピアの『十二夜』が戯曲でビーズログ版が小説であるという作品のジャンルの違いによるものでしかない。同時に「マルヴォーリオいじめ」をわざわざ排除する要因は「売れるライトノベル」の要素からは見られないのである。にもかかわらず、なぜ「マルヴォーリオいじめ」は排除されたのであろうか。これには、ライトノベルの内容としてネガティブな要素のものを扱わないという性質があるのではないか。ライトノベルに求められる要素「楽しい」「ネタになる」「刺さる」「差別化要因」と関連性がある要素として、飯田は「売れないライトノベル」の要素と次の4点を挙げている。

つまらない、辛い、痛い、キモい、グロイ、重い、暗い、難解。

話題にならない（しづらい）、オススメできない（しづらい）。

読み終わっても何も残らない

どこにでもある、独自性がない、テンプレ乙（型どおりの作品おつかれさまです、の意）<sup>x</sup>

この売れないライトノベルの要素の中で「マ

ルヴォーリオいじめ」は「辛い」「重い」「暗い」という要素を満たしている。ビーズログ版の中のマルヴォーリオは「痛い」「キモい」という要素を持っているが笑い飛ばせ、「ラブコメ」要素を殺さない範囲のものなので残され、「いじめ」の部分は「ラブコメ」に持ち込むには、「重すぎ」バランスが取れなくなってしまったといえる。そして、「マルヴォーリオいじめ」が主人公の側に立っている登場人物たちが行っている「いじめ」行為であるという点から「話題にならない（しづらい）」「オススメできない（しづらい）」となるであろう。なぜなら、主人公が「いじめ」を跳ね返して生き延びるというのはモラルの点から受け入れられるだろうが、いくら仕返しとはいえ現代では絶対的に悪とみなされるであろう「いじめ」に加担した人物が懲罰を受けることなく幸せになり、「いじめ」を受けたマルヴォーリオが虚しく舞台を去っていくという設定は現代の読者にとって受け入れがたい部分があり、したがって「話題にしづらく」そして現実に「いじめ」に苦しんでいる、あるいは苦しんだ経験のある人に「オススメしづらい」という部分を読者が感じるのではないか。このため「マルヴォーリオいじめ」が削除されたと考えることができるの、あるいはマルヴォーリオが失恋をするだけで舞台から去っていく形をとったのではないだろうか。

## 結論

吉村りりかによるビーズログ版『十二夜』は戯曲では舞台上の役者の演技によって、観客が気付かない部分、あるいは戯曲の持つスピード感によって論理的な説明がなされていなくても納得させられてしまう部分に丁寧に肉付けをしている。そして小説という媒体が持つ一定の論理性を必要とする性質ゆえに戯曲の中ではクライマックスの一つとされる「マルヴォーリオいじ

めの場面」を「恋愛」という小説のテーマからの逸脱ということから削除をしている。これらの作業を行うことにより、恋愛ドラマとしての『十二夜』を完成させている。このためビーズログ版「十二夜」は初めてシェイクスピアの作り出した『十二夜』の物語に触れる人にとって、丁寧な説明が行われていることによって、少々突飛な設定であっても一貫した論理性ゆえに、抵抗なく登場人物たちの「恋愛」を楽しむことができるのである。特にヴァイオラとオーシーノー、オーシーノーとオリヴィア、オリヴィアとシザーリオ（ヴァイオラとセバスチャン）の複雑な恋愛模様が十二分な肉付けによって、論理性を与えられながらもジェットコースターのようなスピード感を失っていない。特に戯曲や舞台上演に不慣れな読者にとっては通常の小説と変わらない故に抵抗も少なく小説としても成立しているために、躊躇なく読むことができる作品となっている。しかし、ビーズログ版『十二夜』は古典を小説化した単なる戯曲の入門編として扱うことは難しい。なぜならば小説として独立した作品として十分に通用するものとなっているからだ。

むしろビーズログ版は戯曲を知っている読者にとっては、上演を目的とする戯曲では表現することが難しい丁寧な場面説明や登場人物による心情の吐露は役者の演技だけでは到底くみ取れない部分まで説明をされているので、より登場人物に感情移入をして読むことができる。しかしながら、戯曲の持つ無限の解釈の可能性というのはなくなってしまうため、シェイクスピア版の「十二夜」を知っている読者にとって難しい小説となるのではないかと思われる。なぜなら舞台を見たことがない読者にとっては舞台上演における観客の想像力に任せてしまう部分の説明をされているので、読了後に舞台を見る際には想像力の補助となることはあっても、邪

魔となることはないからだ。しかし戯曲としての『十二夜』を知っている読者からすると自らの観劇体験あるいは戯曲の読書体験が、ビーズログ版の内容を新たな戯曲の解釈として受け取るか、あるいはあり得ないものとして受け取るかに分かれてしまうからだ。

ラノベ化されたビーズログ版の『十二夜』には、もう一つ重要な役割があると言える。それは古典戯曲に足を運ぶ観客誘発の役割である。昨今流行している2.5次元舞台を見ればラノベの読者にとって、「読んだことのある小説」「内容を知っている小説」の舞台へは躊躇なく劇場に足を運ぶ機会にこそなれ、観劇体験を妨げるものにはならないはずである。そのような意味では、ラノベ形式で作られ出されたビーズログ版の『十二夜』は戯曲作品を今後も生き残らせるためには非常に重要な役割を果たしている。したがってビーズログ版『十二夜』を入門編という常に主とする作品に対して従属的な立場を与えられ、主とする作品を超えることがないという評価を下すのは不当であると言えよう。

本稿は第56回シェイクスピア学会のセミナー3『十二夜を読む』において発表をした内容に加筆修正をしたものである。

<sup>i</sup> 新城カズマ『ライトノベル「超」入門』ソフトバンク新書 ソフトバンク・クリエイティブ株式会社, 2006, pp.18-26

<sup>ii</sup> 「恋するシェイクスピア」シリーズ『十二夜』 URL: <http://bslogbunko.com/shakespeare/index.html>

<sup>iii</sup> 吉村りりか『恋するシェイクスピア 十二夜 一身代わり小姓と不機嫌な公爵―』p28

<sup>iv</sup> 吉村りりか, pp.23-72

<sup>v</sup> 吉村りりか, p.274

<sup>vi</sup> 吉村りりか, p95

<sup>vii</sup> 吉村りりか, pp98-9

<sup>viii</sup> 飯田一史『ベストセラー・ライトノベルのしくみ-キャラクター小説の競争戦略-』青土社, 2012, p.24

<sup>ix</sup> 飯田一史, p35

<sup>x</sup> 飯田一史, p36

---

## テキスト

吉村りりか『恋するシェイクスピア 十二夜 一身代わり小姓と不機嫌な公爵―』, KADOKAWA, 2016

## 参考文献

飯田一史, 『ベストセラー・ライトノベルのしくみ-キャラクター小説の競争戦略-』 青土社, 2012

石田美紀, 『密やかな教育-＜やおい・ボーイズラブ＞前史-』, 洛北出版, 2008

一柳廣孝, 久米依子 編著, 『ライトノベル研究序説』, 青弓社, 2000

―『ライトノベル・スタディーズ』, 青弓社, 2013

大橋崇行, 『ライトノベルから見た少女／少年小説史-現代日本の物語文化を見直すため人-』, 笠間書院, 2014

菅聡子, 『＜少女小説＞ワンダーランド-明治から平成まで-』, 明治書院, 2008

ジュエル文庫編集部 編, 『キスの先までサクサク書ける! 乙女系ノベル創作講座』, KADOKAWA, 2017

新城カズマ, 『ライトノベル「超」入門』, ソフトバンク・クリエイティブ株式会社, 2006

嵯峨景子, 『コバルト文庫で迎える少女小説変遷史』, 彩流社, 2016

西村マリ, 『BLカルチャー論-ボーイズラブがわかる本-』, 青弓社, 2015

溝口彰子, 『BL進化論-ボーイズラブが社会を動かす-』, 太田出版, 2015